花火大会の翌朝に（多摩市）

ぼくは誠、この四月に中学生になった。中学生になってやろうと決めていたことがいくつかある。そのうちの一つが、せいせき多摩川花火大会の翌朝の清掃ボランティアだ。ぼくには直子という姉がいて、一昨年、花火大会後の清掃ボランティアに参加した。姉は、やる前には、気が重いとか、朝早いとか、休んでしまおうかなどと大騒ぎしていたのに、実際やってみたら、言うことがすっかり変わっていた。

「誠も中学生になったら、ボランティアの一つでもやった方がいい。」「花火大会の翌朝のごみはたくさんあって、配布されたごみ袋がいっぱいになるほどだよ。」「終わったあとのジュースがおいしい。普段飲んでいるのとは、なぜか味が違う。」などとさんざん聞かされた。最初は、全く興味がなかった。でも、姉からしつこく聞かされているうちに、やってみようかなという気になってきた。花火打ち上げ会場に散乱したごみをみんなで励まし合いながら拾う様子を想像したり、ゴミ拾いの仕事を終えた後に土手に腰掛けて飲むジュースはどんな味なのか考えたりするようになった。それで、中学校に入学したら、やってみたいことの一つになったのだ。

七月上旬、担任の先生が花火大会翌朝の清掃ボランティア募集の申し込み用紙を配った時、ぼくは真っ先に参加申し込み書を提出した。担任の先生に「やる気があるね！」と言われた。もちろんだ。ぼくはジュースが目的とはいえ、本番前からやる気がある。同じクラスの亜希子にも「誠が参加するなんて意外。すごいねぇー。えらい‼」と言われた。ぼくは「ボランティアはやらされるものじゃなくて、自分からやりたいっていう気持ちが大切なんだよ。なんてな。」と言ってみた。周りのみんなに、「おぉ、すげー。」とか言われて、ぼくは気分がよかった。本番が楽しみだった。

花火大会の八月十二日、ぼくは陸上部の友人たちと会場にいた。約二十三万人がこの会場周辺にいるらしい。会場は人でごった返していた。ビールを飲んでいる大人、弁当を食べている人、アイスを食べている人……。これだけの人がいるのだから、明日のゴミは相当多いのだろうとぼくは想像した。実行委員の人がゴミ持ち帰りの呼びかけをしていた。姉はこの呼びかけを

を聞いて、暗い気持ちになったと言っていたが、ぼくは違う。どんなにごみがあろうとも、全部拾ってやる！頑張った後の乾杯を想像して、ぼくはやる気満々だった。ドーン、ドーンと腹に響くような音を聞き、頭上から落ちてくるような花火を見て、「明日は頑張るぞー!!」という気持ちが高まった。陸上部の仲間も、ぼくの誘いで明日一緒に参加することになっていた。

翌日、朝六時半。清掃ボランティアの集合時間だ。仕事がある人も、出勤前に参加できるようにという理由でこんなに早い時間に設定されているらしい。聖蹟桜ヶ丘駅に中学生、保護者、商店街、自治会、市役所、老人会の人等、多くの人が集まった。校長先生、先生方、陸上部の仲間、亜希子やクラスメイトの姿もあった。いくつかのグループになり、いろいろなルートに分かれて、駅から多摩川に向かってごみ拾いをすることになっている。ぼくのグループは、陸上部の仲間、亜希子たち、担任の先生が一緒で、自治会長さんがリーダーになった。

「花火大会の会場までこのグループで行動します。今から一人一人にごみ袋を配布します。最後に分別しますので、よろしくお願いします。」とあいさつがあった。軍手をはめ、ゴミ袋を片手に花火会場までみんなで歩いていった。歩きながら、道に落ちているごみもついでに拾いながら、ぼくのやる気は最高潮に達していた。

ところが、多摩川の土手にたどりついたぼくは自分自身の目を疑った。ぼくたちの目の前にはいつもの多摩川とかわらない景色がひろがっていたのだ。土手から河原にかけて、目立つゴミなどはほとんど見当たらなかった。ぼくが想像していたのは、ビンや缶、食べ残し、紙ごみなどが散乱している景色だったのだが……。

「ぼくたちは来るのが遅かったのですか?!誰かがもう、ごみ拾いをしてくれたのですか?!」ぼくは責めるように自治会長さんに尋ねた。

「いや、そうじゃない。年々来場者のマナーが向上しているんだよ。花火大会が終わって、落とし物をチェックした時に驚いたけどね。ゴミを持ち帰る人が増えたってことなんだ。」と教えてくれた。

ぼくたちは、ごみを探しながら、競うように拾った。おそらく数か月前に捨てられたような風化したごみや、雨水がたまっているような缶、茶色く変色したぼろぼろのたばこの吸い殻などをほじくって拾ったりした。はっきり言って手持ち無沙汰だった。亜希子が、「私たち、必要なかったね。」とぽつりと言った。みんな口々に、「正直、こんなに人数いらなかったな。」「これじゃ

あ、朝の散歩じゃん。」と文句を言いながら、みんなで袋をぶらぶらさせながら歩いた。

ぼくも、正直がっかりした。大変かもしれないけど、みんなで頑張ってごみ拾いというボランティア活動をして、充実感を味わって、最後にジュースで乾杯するというシナリオだった。しかも、陸上部の仲間を誘ったぼくのメンツも丸つぶれになってしまい、ふんだりけったりだった。姉が言っていた言葉を思い出した。

「花火大会は、陰で支えている実行委員やボランティアで成り立っているの。中学生ができることは清掃ボランティアかもしれないけど、この清掃活動で花火大会が完了するって言われた。自分たちが、この大きな大会を支えるメンバーの一人として活動するって、すごいと思わない？」

姉のこの言葉がむなしく頭の中で響いた。

会場の真ん中に大きなごみ収集箱が設置されていて、みんなが拾い集めたごみを分別した。あっさりと、そして、あっという間にぼくの初めてのボランティア活動は終了した。

「中学生の皆さーん、お疲れ様‼ジュースを用意してあります‼」という声が聞こえた。あんなに楽しみにしていたジュースだったが、期待したほどおいしくないだろうと思った。先生に促されて、ジュースを受け取りに行った。

乾杯の前に、市役所の人のあいさつがあった。

「皆さん、お疲れ様です。実はここで素晴らしいニュースがあります。多摩市は平成二十年度、多摩地域二十四自治体中、最もごみ総量が少ない自治体になりました。どの自治体も環境に配慮したごみ減量策を展開し、前年度のごみの量を下回りました。そんな中、前年度十一位だった多摩市がなんと、一位になったのです。一人当たりのごみの量が一日五００g台という結果になりました。」

「おぉー！」みんなの歓声があがった。みんなちょっと笑顔になった。

「市民一人一人の積み重ねがあったからこその一位です。花火大会も来場者のマナーが向上したからこそ、ごみも減りました。もしかして、今日、あまりごみが落ちていないから、みなさん、自分たちの活動に意味がないのでは、と思ったかもしれませ

ん。それは違います。今日、自分たちの地元の花火会場をきれいにしようという気持ちで参加してくれたことに意義があるのです。一昨年、みなさんの先輩たちが初めてこの活動に参加してくれた時、ごみはたくさんありました。中学生が花火大会後の清掃活動に取り組んだことが地域のミニコミ誌で紹介され、大変反響がありました。中学生までもが清掃ボランティアをしているのだから、散らかしてはいけないな……とおっしゃっている方もいました。みなさんは、『ごみが少なく、環境にやさしいまち多摩市』の心強いサポーターです。みなさんは、花火大会を成功させた大切なメンバーです。」

市役所の人の話を聞いて、みんなの顔がパーっと明るくなったような気がした。ぼくも、いい話を聞いたな、と思った。ぼくたちが花火大会を成功させた大切なメンバーと言ってくれたけど、花火大会を成功させたのはぼくたちだけじゃないな……と思った。

みんなで土手に座ってジュースの乾杯をした。

「私たちって、ちょっとは役に立ったんだね。今日、参加してよかった。」亜希子が言った。

「そうそう、花火大会前よりきれいにしちゃったものね。古いごみも拾ったし。『来た時よりも美しく』ってマナー広告があったよね。」

みんな、明るいニュースのおかげで元気になったみたいだった。

「将来、花火大会の翌朝の清掃ボランティアが本当に必要なくなる日が来るといいよな。」

ぼくの言葉に数人がうなずいていた。電車が陸橋の上を走っていくのが見えた。さわやかな風が川の方から吹いてきて、川面はキラキラ輝いていた。想像していたジュースの味ではなかったけど、いつもと違う味がしたような気がした。

（三浦　摩利　作）

花火大会の翌朝に（多摩市）

（中学校 4-（2））

（1）ねらい

公徳心及び社会連帯の自覚を深め、よりよい社会の実現に努めようとする心情を育てる。

（2）資料の特質

本資料には中学一年生の主人公、誠が初めてボランティア活動を体験する様子が描かれている。姉から話を聞いて花火大会後の清掃ボランティア活動にあこがれ意欲を膨らませる誠だったが、活動の実際ではゴミがほとんどなく、肩すかし感を抱く。来場者のマナーの向上はいいことだが、ボランティアとしての使命感を見失いかける。しかし、市役所の人から「地元の花火大会をきれいにしようという気持ちで参加してくれたことに意義がある」との話を聞いて、もう一度、社会貢献の大切さを振り返るのである。

（3）展開例

1　地域などで行っているボランティア活動について発表する。

2　資料「花火大会の翌朝に（多摩市）」を読んで話し合う。

①誠はどんな気持でボランティア活動をやろうとしたのか。

・終わった後の充実感を味わいたい。

②清掃ボランティア活動を行っているとき、誠はどんなことを考えたか。

・ゴミが少なくてやりがいがないな。

・意気込んだ分、みんなに気まずいな。かっこ悪いな。

③市役所の人の話を聞いて、誠はどんなことを考えたか。

・地元を支えようとする気持ちが大事なんだな。

3　教師の話を聞く。

〇教師の体験したボランティア活動や社会貢献につながった内容を話しまとめとする。

（4）指導上の留意点及び工夫

生徒が行っているボランティア活動や社会貢献活動について事前に調査し、資料での話し合いの際にその体験や思いなどを意図的指名によって発表し合うようにする。

〔本文イラストは東京学芸大こども未来研究所による〕